交通災害共済

家族そろって加入しよう

毎日のように、新聞等で交通事故による死傷者の記事が報道されています。「会員相互の助け合いによる見舞金を」と、役場ではご家族そろって《交通災害共済》へ加入されるようおすすめしています。

加入資格
岩室村に住んでおられる方はどなたも加入できます。

会費
一人（年額）三五〇円

共済期間
毎年四月一日から翌年三月三十一日まで

加入申込
部落区長さん、各農協、役場企画課へ

※氏名を記入した『加入申込書』を近日中にお配りしますから、それに加入される人、ない人を消し、加入する人の代金を添えて申込み下さい。なお、預金口座よりの引落しを希望される方は、その旨農協へ申出下さい。

見舞金の請求
万一交通事故にあわれたら『請求書用紙』が役場企画課にありますからご連絡下さい。

見舞金額
最高五十万円から最低五千円まで、災害の程度に応じて支払われます。

昭和四十六年度の見舞金の支払は、二月末現在で次のような状況です。

◎全治一週間以上
見舞金　二万五千円
件数　五件

◎全治一ケ月以上
見舞金　六万円
件数　三件

◎全治三ケ月以上
見舞金　五万円
件数　一件

◎全治六ケ月以上
見舞金　十万円
件数　一件

計二十三万五千円

◎原因別件数

車対車	一件
車対バイク	五件
車対自転車	一件
車対人	一件
車対物	一件
自転車転倒	一件
計	十件

"村議選"を終えて感じたこと

久保田　鈴木直市

去る一月二十三日に行われた、任期満了による村議会議員の改選で新しく当選された二十名の方々に、心からお悦び申し上げます。

半数の若い新議員が当選されたことで議会に新風を送り村勢の躍進が期待されます。そして、全議員が青年横山村長と協力して、村政発展のために御尽力下さるよう希望する次第であります。

さて、選挙運動について一言申し述べさせていただきますと、「村」という小区域での運動のあり方として、余りに大袈裟だったと思われたのですがどうでしょうか。

ポスターのあの物凄い数量と、連日、車による拡声器での連呼は、まるで一種の騒音公害だったとは言えないでしょうか。

当事者は、それなりに事情のあったことは判らぬでもありませんが、先にも述べたように「村」という小区域なのですから、あんなやり方を改めたらどうでしょうか。ポスター掲示と、広報「いわむろ」の臨時号外による候補者の意見発表などにしぼって、正しい審判をまつというようにしたら、静かな選挙ができると思うのですがどんなものでしょうか。

区長名簿

区	区長
金池	浅田喜代治
石瀬	本間八十太郎
岩室	武藤源治郎
樋曽	渡辺茂樹
栄	青柳正彦
橋本	金子秀蔵
久保田	有坂正家
猿ヶ瀬	竹内久松
南谷内	金川英二
北野	樋口長一
夏井	田中吉方
西中	竹内以知司
潟上	斎藤定雄
白鳥	木部久弥
西長島	三富重二郎
横曽根	菅井敏夫
西船越	小林盛夫
新谷	小川弘
油島	毎月交替制
高畑	鷲沢宰一
間瀬一区	石塚栄司
二区	宝賀越亥
三区	田中高蔵
四区	山本芳太郎
五区	篠原治蔵
六区	高綱長吉
七区	阿部喜八郎
和納一区	早川喜五郎
二区	宮野源一郎
三区	大越要一
四区	伊藤喜一
五区	竹内松太郎
六区	池上源蔵
七区	大越安之丞
八区	樋口栄作
九区	石倉正義
原	宮島秀夫
津雲田	本多忠作
富岡	川上忠氏
高橋	阿部仁作

岩室地区 婦人会研修会

去る二月十四日、県立青少年研修センターで「著るしい社会情勢の変化の中にあって、主婦として望ましい家庭生活、家族関係はどうあればいいのか」を主題に、すばらしい施設と明るい雰囲気のなかで一日研修いたしました。

「現代社会と家庭生活」についてセンターの所長から、子供が母からは温かい愛情を、父からは男らしさと決断心を体得できるような家庭環境であってほしい。また更科先生からは「家庭と人間関係」について、具体的な事例等おりまぜながら、家庭における主婦の役割についてお話しいただき家庭生活がますます多様化し複雑化している現在、その中心である主婦も積極的に学習しなければならないことを確認いたしました。

戦争と民衆

―西蒲戊辰の記録―

村誌調査員　西川竹園高校　松永克男

越後における戊辰戦争を紹介した書物の中で、三根山藩の動向はほとんどふれられていない。小藩であまりぱっとした動きをもなかったと言えばそれまでだが、不合理な気がする。

それとは逆に、ほぼ時と場所を同じくしておこった長岡領巻・曽根組を中心とした打ちこわしとなるとほとんどの書物がこれを取りあげ、しかも世直し一揆として高く評価する。しかしその割には、あまり明らかにされていないのが現状である。この騒動の研究物としてはまだ「慶応四年西蒲原郡巻曽根地方打毀」（越後佐渡農民騒動所収）をこえるものは出ていない。

本稿は三根山藩の動きや打ちこわしに視点をおき、西蒲地方における戊辰（一八六八）の流れを整理する意味でかいてみた。

○三根山藩の参戦

三根山藩は本家長岡藩との関連から奥羽越列藩同盟の一員ではあったが、実際は、風にそよぐ葦さながらに、官軍か同盟軍かの去就を最終的に決しかね、長岡藩との諒解のもとに、形勢を傍観していた。五月十九日の長岡落城はこのような三根山藩の日和見的態度を一層助長させた。

しかし周囲の情勢切迫とともに、三根山藩にも危機がおとずれた。同盟軍の主力庄内藩はこのような三根山藩の態度にいち早く疑惑を深め、兵を率いて三根山の近く松郷屋に陣取り、出兵をうながした。この強硬な態度に屈した三根山藩はついに岡本直記を隊長として寺泊表へ出兵し、さかんに官軍に対して砲発し、自藩にむけられた疑惑の目をかわそうとはかった。この試みは一応成功したものの、事実上の参戦によって領民の動揺はおおきかった。かくて五月二十二日付で、割元を介して次のような説諭を領民に伝えている。

「御本家様（長岡藩）の轍を踏み、官軍に抗し申すべき儀は元来決てこれなく、さりながら会兵（会津藩）に敵し候ほどの儀は元来小藩微力……兎も角も御封土不失御領民と一和致度存慮の外他事無之思食ニ候間……心得違無之様教諭致可申……」

○長岡領打ちこわし

戦争の巻添えをくらった民衆こそあわれである。両陣営から人夫、物資の徴発があいつぐ。物価はうなぎのぼり。戦火のおよぶ所は、どこでも同じだった。三条町（村上藩＝同盟軍側）では町人らは荷物、諸道具を取りかたづけ、近在へ運び始めた。領主にとっては人夫の徴発に支障をきたすので、度々触書を出して取り締まったが、一向にききめがない。それもそのはず、三条町人らは「最早市中の者は村上の領分にてはこれなき心持」（「美々袋」三条・松永家文書）であったからだ。民衆の領主からの離反は西蒲地方の長岡領においても同様であった。

官軍と同盟軍が中越一帯に戦火をまじえていたころの五月五日から六日にかけて断続的に降り出した雨は七日になって大雨となり、八日には「近年これなき」大洪水となった。中之口川に数ケ所の土手切れがあり、九日には一旦小降りになったものまもなく出水し始め、信濃川の土手切れもあいつぎ、蒲原一帯は未曽有の水害となった。五月十二日頃から川水が引き始めたが、その後も依然として雨の多いぐずついた天候が続いた。戦争に加え、この水害である。米不足は目にみえている。藩と結託する御用商人が暗躍するのもこのような時だ。民衆は米価騰貴の原因がこのような御用商人の米の買〆にあることをよく承知していた。

長岡藩の財政に掛かり合いをもつ御用商人の多い吉田村にまず騒動の火の手があがることは、当然の成行きであった。長岡落城の翌五月二十日、藩の所有する蔵米の売却に対して、それを阻止し、しかも米の無償分配を要求する貧民との間にまず争いがあった。これは割元富所平次左衛門が全面的に要求を入れたため、大事にいたらなかった。翌二十一日にも佐渡山村にある蔵米をめぐって同様の争いが生じ、次第にエスカレートしてきた。二十五日には同じ理由から漆山村割元が打ちこわされた。

以上が巻組を中心とした動きであるが、もう一つ騒動の芽が曽根組にめばえていた。もともと曽根地方は割元排斥運動が根強く行なわれた所で、一時割元役の公選制も実施されたいわば反骨の里であった（新潟吉田家文書）。

五月二十四日夕刻に官軍の五ケ浜着船の報があって、三根山藩は藩主もろとも退却の準備を始めていた。このような領主側の動揺をついて、一揆勢は西上して二十六日巻組に入り、なおも三根山領和納村に近づきつつあった。

その頃「一揆勢は和納村の社前に集合して気勢をあげたのち、官軍の出張先まで罷り出る」とのうわさが流れていた。はたして何を要求するものであったかは不明としても、前述の巻組を中心とした騒動とは異なって、何らかの政治性を備えた一揆であったと思われる。

さてこのような曽根組一揆の嵐の中で、二十七日には中興屋村、善光寺村、西汰上村の割元層と曽根村の二軒が打ちこわされた。翌二十八日から二十九日にかけては巻組と曽根組一揆勢の合流によって最大規模の打ちこわしが展開した。

一揆はまず長岡藩の財政に関与していた吉田村割元富所平次左衛門、御用商人今井孫兵衛、加賀屋佐右衛門の三軒に乱入し、土蔵等を打ちこわした。並木村、中野村、馬堀村庄屋宅も同様のうきめにあった。この時の騒動の中心人物は江戸帰りの天木師(香具師か)佐渡山村出身の半助という男であったといわれる（「日記」加茂・山崎家文書）。長岡藩は一揆鎮圧のため、役人三十人ほどを派遣した。その時役人らは威嚇のため鉄砲を放ったが、はずみに一揆側の二人を射殺してしまった。激昂した一揆勢は報復としてその場で役人一人討ち取り、さらに浜首で一人、粟生津で二人計四人を殺した。これでは役人もかたなしである。それにしても一時全くの無政府状態となった。一揆勢の総数は「美々袋」によれば約四千人といわれている。なお巻村方面では巻代官所、巻割元、御用商人藤田屋、吉野屋の四軒が打ちこわされた。

○三根山藩の降伏

六月に入って一揆はぱったりやんだ。戦争も両軍相対峙したまま約一ケ月を経過した。この均衡状態を打破ったのは官軍の新潟占領である。七月二十五日、柏崎から四隻の船で輸送された千余人の官軍は阿賀野川東岸松ケ崎に上陸し、二十七日には米沢藩の死守する新潟をせめ、二十九日これを落した。この日から同盟軍は腹背から官軍の攻撃をうけるはめとなり、なだれを打って敗走を開始した。

この頃の事であろうか。原・桑原家所蔵「旧記」に、三根山領に立入り乱暴を働いた同盟軍の兵士三人を農民が討ちとったと記録されている。農民の増悪があからさまに同盟軍に向けられていたことになるが、民衆の支持を次第に失っていく同盟軍、とりわけ長岡藩、会津藩の様子は当時のわらべ歌にもその一端を伺うことができる。

△会津、桑名の腰抜士どこへにげても皆ごろし。やっこらさ。

△蛸にほねなし、だるまに足なし、長岡殿様城がない。やっこらさ。

△長岡殿様油屋のしめ木、うしろまえからしめらる。とんやれやれ。

△長岡殿様でんがくすきで、やいてかえして味噌つけた。やこらさ。すっとことん、やれやれ。

（「美々袋」）

八月一日には敗走する同盟軍を追って官軍の尾張藩兵が地蔵堂から粟生津に移って本陣をかまえ、二日には吉田村に官軍の松代、越前藩兵が本陣をおいた。この動きをみて三根山藩はかねての手はず通り、地蔵堂の同盟軍から兵を脱走させるとともに、内野村駐屯の長州藩に降伏を乞い、また弥彦、出雲崎口の官軍には歎願書を差出し降伏した。三日には長州藩軍監、隊長らが三根山に到着し、以後官軍の一員として村上方面に出兵することとなった。その後の三根山藩の動向についてはのち機会をえてふれることにしたい。

※　三根山藩関係については特にことわらぬかぎり津雲田神保家文書を使用させていただいた。